



鹿児島大学病院リハビリテーション科

下堂 蘭 恵 先生

鹿児島大学病院リハビリテーション科教授

鹿児島大学病院リハビリテーション科の歴史

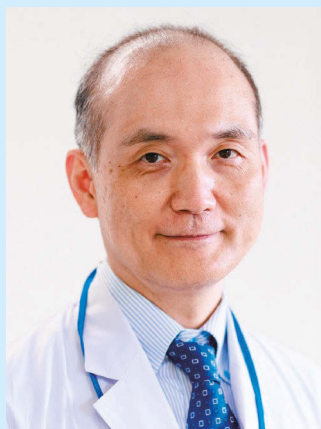
「1988年、鹿児島大学医学部にリハビリテーション医学講座が開講しました。同時に霧島分院が改組され、同講座に対応する診療科として鹿児島大学医学部附属病院霧島リハビリテーションセンター（リハビリテーション科）が新設されました。1996年からは鹿児島大学病院本院でリハビリテーション科の診療を開始しました。そして2018年には、建物の老朽化などを踏まえた将来計画の検討により霧島リハビリテーションセンターを閉院、機能を鹿児島大学病院内へ移転しました。2024年には新棟が完成し、より一体的な診療体制が整備されました。現在、鹿児島大学病院リハビリテーション科は、主に急性期のリハビリテーション医療を担うリハビリテーション部に加え、回復期の入院診療を担う、特定機能病院リハビリテーション病棟、一般病床、専門外来（痙縮、疼痛・しびれ、義肢・装具）で幅広く診療を行っています。なお大学院大学化に伴い、2008年より教室名は『鹿児島大学大学院医歯学総合研究科運動機能修復学講座リハビリテーション医学分野』となっています。」

研修での経験や実践的スキルの習得

「高度急性期から回復期まで、大学病院内で一貫したリハビリテーション診療を実践できることが大きな特色です。当教室では『訓練室で指導できるリハビリテーション科医たれ！』の方針のもと、リハビリテーション処方に加えて、療法士と協働し、促進反復療法や電気・振動刺激、各種リハビリテーションロボットなどの実践を徹底しています。検査・診療手技の面では、装具診での義肢・装具の処方やチェックアウト時のプレゼンテーション、ボツリヌス療法、神経ブロック、嚥下造影・嚥下内視鏡、電気生理検査などを体系的に習得できます。」

教育・サポート体制など

「専攻医はまず病棟の主治医を担当します。病棟は指導医・専門医を含む3名×2グループ制で運用しており、マンツーマン指導に加えて、多職種による病棟カンファレンス、グループ回診、教授回診、



下堂 蘭 恵 先生

鹿児島大学病院
リハビリテーション科

病床数：病院 704 床（うちリハビリテーション科病床：特定機能病院リハビリテーション病棟 20 床、一般病床 1 床）、スタッフ構成：医師 16 名、理学療法士 28 名、作業療法士 12 名、言語聴覚士 6 名、看護師 16 名

〒890-8520 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1

装具診、定期勉強会、抄読会、予演会、他科コンサルテーションを通じて、最新の知識・技術と臨床判断を継続的にアップデートします。大学研修の2クール目では、急性期を中心に他科からの紹介外来で、各種疾患のリハビリテーション診断・治療を経験していきます。」

専門医を目指す医師の特色

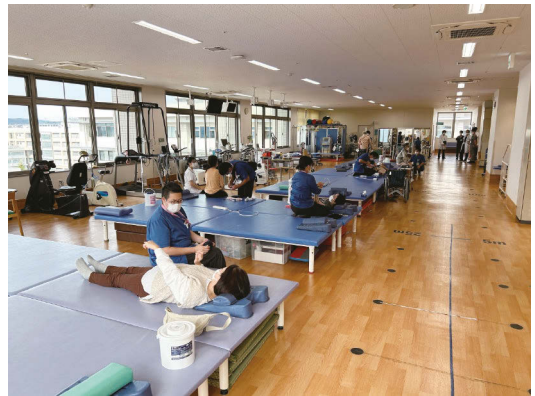
「専攻医は、初期研修を終えた医師に加え、他診療科からの転向者、女性医師、県内外出身者など多様なバックグラウンドをもつ医師たちを積極的に受け入れています。開講 37 年を経過して 70 名以上のリハビリテーション科専門医を全国に輩出しており、互いに学び合い研鑽できる環境が整っています。」

ライフイベントを考慮した働き方

「子育てや介護などのライフイベントに応じて、勤務日数や勤務時間を柔軟に調整できます。現在も、カリキュラム制のもと専門医資格の取得を目指



装具の調整について確認する下堂菌先生



明るく眺めがよいリハビリテーション室

して勤務する女性医師が活躍しています。」

連携施設や研修先施設の数や特色

「現在、連携施設は11施設、研修協力施設は1施設です。地域の急性期病院から回復期病院まで幅広く登録されており、在宅医療では、訪問診療や訪問リハビリテーションを推進するクリニックを開業しているリハビリテーション科指導医の施設を選択できる点も特色です。対象患者は小児から高齢者まで幅広く、疾患領域も多岐にわたるため、専門医資格の取得に必要な症例を十分に経験できます。」

研究開発活動に関する経験

「当教室は、臨床研究と基礎研究の双方に取り組んでおり、希望者は学位取得を目指すことができます。臨床研究では、中枢神経の損傷後にみられる片麻痺、感覚障害、高次脳機能障害、嚥下障害に対する新たなリハビリテーション治療の開発に注力しています。特に、先代の川平和美名誉教授が開発した運動療法『促通反復療法』を基盤に、末梢からの電気刺激（NMES・TENS）や振動刺激などの物理刺激、経頭蓋磁気刺激や経頭蓋直流電気刺激などのニューロモデレーションを統合し、さらにBMIやVRを組み合わせることで、臨床効果や機能回復のメカニズムを電気生理学的手法や脳機能画像により検証し、効率的な治療法・診断法の確立を目指しています。加えて、がんのリハビリテーションの有用性を検証する研究も進めています。リハビリテーションロボットなどの機器開発については、工学系研究者との医工連携・産学連携を推進しています。一方、基礎医学研究では、小型霊長類であるマモセットを用いた脳梗塞モデルを作成し、三次元動作解析による定量評価など、臨床医学に直結する研究



多職種カンファレンス後のひとコマ

を展開しています。」

研修プログラムへの参加呼びかけメッセージ

「病気の診断・治療に加えて、障害の診断・治療に取り組み、患者さんに寄り添って生活の質の向上を目指したい方を歓迎します。初期研修修了直後の医師はもちろん、他科からの転向を検討する医師や地域志向の医師も大歓迎です。専攻プログラムでは、訪問診療・訪問リハビリテーションなど在宅医療を積極的に展開するクリニックでのローテーションも整備しています。新しい治療法の開発や医工連携など、イノベーションを志向する方にも最適な環境です。また、私たちは患者さんの『生活』を中心に据え、急性期から生活期まで一貫して寄り添うリハビリテーション医療を実践しています。医師として大切にしたいことは、地域医療、研究、ワークライフバランスなど人それぞれで、ライフステージによって優先順位も変化します。皆さまとともに、鹿児島からリハビリテーション医療の未来を切り拓いていけることを楽しみにしています。」

（文責：広報委員会）